

<外国語科>

ICT を活用した「主体的に楽しく学ぶ生徒」が育つ授業づくり

～「できた・わかった」を実感しながらコミュニケーションに挑み続ける生徒の育成～

大垣市立東中学校 教諭 廣瀬 葉子

概 要

本研究の目的は、ICT を効果的に活用しながら、生徒が主体的に楽しく英語が学べるようになることである。言語活動の中で、既習事項を活用したり、仲間とのやり取りから自分が使いたい表現を再構築したりして「できた」「わかった」を実感しながら主体的にコミュニケーションに挑む生徒を育成していきたい。

新しい学習指導要領では、聞くこと、読むこと、話すこと [やり取り]、話すこと [発表]、書くことの五つの領域別に設定する目標の実現を通して、英語特有の資質・能力を育成する必要があるとしている。五領域の学習到達目標を明らかにすることで、生徒に明確な目的意識をもたせ、「できた・わかった」という実感を重ねることで、自信を深め、英語が楽しいと感じられるようにしたい。

これらの姿を目指すために、「継続的な ICT を活用した学習」と「言語活動の場面・状況設定の工夫」をすることで、日常的に授業の中で育成できるのではないかと考え、本実践を行なった。

1. 主題設定の理由

本校の研究主題は、「自ら課題を追求し、仲間と共に学びを深めることができる生徒の育成～ICT を活用した授業実践を通して～」であり、英語科の研究主題は『「できた・わかった」を実感しながら、コミュニケーションに挑み続ける児童・生徒を育てる指導を求めて～五領域における学習到達目標を明らかにし、言語活動の中でその到達を実感させる指導・評価の在り方～」としている。

生徒たちが、主体的にコミュニケーションに挑み続けるためには、英語でのやりとりや各活動の中で楽しさや喜びを感じ、「できた・わかった」と積み重ねていくことが大切であると考ええる。

また、GIGA スクール構想により、タブレットが導入され、個々のレベルに合わせた学習や共働的な学習が可能となってきた。今までは、プリント学習で、行っていた教科書の読み取りをタブレットで行うことでどのようなメリット・デメリットがあるのか試してみたいと考えた。また、中学1年生が苦手とするライティングも、タブレットを使用することで、負担を減らし、楽しく練習することができるか模索した。

今年度から教科書が改訂され、中学で習う英単語は、1200 語程度から、1600～1800 語程度へと増加し、小学校で扱う 600 語程度の英単語は既習単語として中学校の教科書に掲載され

ている。さらに、高校内容の一部が中学の内容に加わり、英単語のみならず文法事項も増加している。

ただでさえ、中学1年生で、英語への苦手意識が出てくる生徒がいるのに、覚える量が増えることで、さらに苦手意識をもつ生徒が増えるのではないかと懸念される。

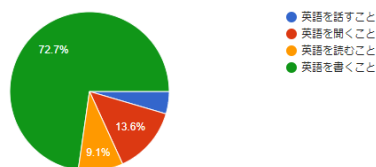
本校の第1学年の生徒たちは、小学校での「英語科」を通して、積極的に英語を話そうとする姿が定着している。一方で、対話活動の Small Talk において、対話が止まってしまう生徒たちの姿も見られた。主な理由は、尋ねられたことに一問一答で答え、会話がそこで終わってしまうからであった。「言うことは言ったし、もう終わった」というものであった。真のコミュニケーションとは、相手の立場、状況、価値観などに合わせながら、よく聞いて反応したり、さらに尋ね返したり、自分の意見を伝えたりして、互いをよく知るために、共に興味を深めていくために、話し続けることだと考える。既習事項を使って話したり、仲間の表現のよさに気付き、その表現を取り入れながら自分の表現を再構築したりする生徒同士の学び合いこそ、生徒が生き生きと仲間と関わって英語を使おうとするのではないだろうか。そのためには、コミュニケーションの基礎となる、聞く姿、反応や確認をする姿、自分の考えを話し、相手の考えを聞くというまさに総合的な力が必要とな

ってくるだろう。生徒に英語の楽しさや喜びを感じながら、5領域の総合的な力を身に付けてほしいという思いから、研究主題を「主体的に楽しく学ぶ生徒が育つ授業づくり」とした。

2. 研究仮説

本研究をするにあたって、始めに生徒たちにとってアンケートでは、「英語が好きか」という問いに対し、「どちらかといえば、当てはまらない」が24.1%、「当てはまらない」が17.2%と、英語があまり好きでない生徒が41.3%もいることが分かった。英語が苦手とする生徒に「どの分野が苦手なのか」という問いをしたところ、「英語を書くこと」を苦手とする意見が多く挙げられた。

英語が苦手だと感じる人は、答えて下さい。特に、どの分野を苦手だと感じていますか。
22件の回答



「話すことはできるが書けない」、「単語の綴りを覚えることができない」と不安を感じている現状があった。その要因として、次のことが考えられる。

- ① 単語の綴りの覚え方が分からない。
 - ・発音と文字が一致していない。
 - ・ローマ字が身につけていない。
 - ・フォニックスが身につけていない。
- ② 単語量が多く、覚えきることができていない。
 - ・小学校から習った英単語は教科書では既習単語として掲載されており、新出単語として扱われていない。しかし、実際は、小学校では触れた程度で、ほとんどの綴りを中学生から覚えている。
 - ・品詞を意識して単語を覚えることができていない。

生徒たちが主体的に英語の綴りを学ぶためには、帯活動で、継続的に英単語を覚える時間を取り入れていくと良いと考えた。また、対話活動で仲間と話したら、そこで終わりにせず、「書く」活動を取り入れ、発音と綴りを一致させたり、文法を意識しながら考えを整理させたりする時間を設ける。「できた」「分かった」と生徒が実感できるように、繰り返し覚えるまで学習することや、「話す」から「書く」活動を行うことが必要である。

また、日常的な授業において、帯活動である Small Talk では、一問一答ではなく、時間を設

定して、話し続けるようする。Check（確認）・Reaction（反応）・Question（質問）を大切にしながらコミュニケーションし続けることで、聞く力と話す力の向上に繋がると考える。また、Small Talk と並行して、タブレットを用いた単語学習を取り入れ、ゲーム感覚で繰り返し解くことで綴りを定着させる。

言語活動では、自分の考えや気持ちを積極的に仲間と伝え合うことができるような場面・状況設定をし、会話を続けるために、反応や質問、言い換えの仕方を学習する。相手の立場、状況、価値観などに合わせたコミュニケーションをすることでさらに深い学びに繋がると考える。さらに、話した内容を書く活動を取り入れる。

このような指導をすることで、生徒が言語活動をする時に、即興的に表現したり、既習事項を活用して仲間の表現から学び、自分の表現内容を深めたりすることができ、5領域の総合的な力を定着させることができると考える。

3. 研究内容

(1) 帯活動での ICT を活用した単語学習

- ① 既習単語の定着化
- ② 英文の中での表現の定着化

(2) ICT を活用した読み取り活動

- ① ピクチャーカードの並び替えによるリスニング力の強化
- ② T or F や Q and A をオクリンクで送ることによる生徒の理解度の見える化
- ③ リテリングによる表現の定着化
- ④ 書く活動によるさらなる表現の定着化

(3) 主体的に表現を定着させる活動

- ① 英語の授業へ気持ちを切り替え、コミュニケーションし続ける Small Talk
- ② 主体的に話し、学びを深める言語活動

4. 研究実践

(1) 帯活動での ICT を利用した単語学習

- ① 既習単語の定着化
- ② 英文の中での表現の定着化

研究仮説のもと、帯活動では、Small Talk と並行して、ウェブ上のアンケート作成・管理ソフトである「google form」を利用して単語学習を取り入れた。段階は、生徒に負担がなく覚えていけるように、次のようにした。

段階1 英語を日本語にする。

段階2 日本語を英語にする。

段階3 英文の中の空欄に英単語を入れる。

(写真1)

タブレットを使用することで、ゲーム感覚で生徒は解くことができた。また、間違えても繰り返し何度も解くことができるので、全問正解するまで挑戦し続けることができた。

「google form」では、問題の正答率を作成者が見ることができるので、どの問題で生徒が間違える傾向があるのか、また、どのようなミスが多いのかを把握し、生徒に注意を促すこともできた。

Unit 4-1 word check

英文を見て、それぞれの()に当てはまる日本語や英語を入力しよう。

Come to the () . 前に来なさい。

記述式テキスト (短文回答)

(写真1)

発音が身についたかどうかの確認は、文書作成ソフトの「pages」を利用して行った。「pages」では、音声入力にして、タブレットに向かって発音をすればその綴りが表示される。「r」と「l」や「b」と「v」、「s」と「th」などの日本人が間違いやすい発音も違いを意識しながら、練習することで、音の区別ができるようになってきた。

また、単元の終わりなどに、「Kahoot」というウェブアプリを利用し、英単語や英文のクイズを作成し、クラスの生徒全員が参加してクイズ大会を行った。順位も出るため、ゲーム感覚で、クラスで盛り上がりながら、単語学習を行うことができた。(写真2)



(写真2)

(2) ICT を活用した読み取り活動

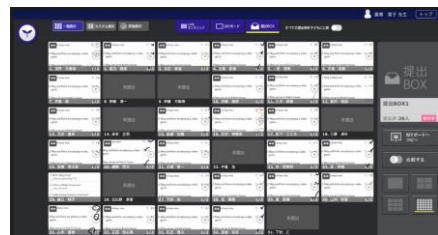
- ① ピクチャーカードの並び替えによるリスニング力の強化
- ② T or F や Q and A をオクリンクで行うことによる生徒の理解度の見える化
- ③ リテリングによる表現の定着化
- ④ 書く活動によるさらなる表現の定着化

研究仮設のもと、「Unit6 A Speech about My Brother」で、研究内容①～④の実践を行った。

① ピクチャーカードの並び替えによるリスニング力の強化

導入の活動として、本文のピクチャーカード4枚をミライシードのオクリンクで配布し、生徒達は、リスニングで聞き取り、並び替えて提出した。そして、T or F と Q and A で内容理解をした後、生徒とのやり取りで内容を確認しながら、カードの並び替えの答え合わせをした。その結果、本文の内容理解 (T or F と Q and A) をする前から、初めて聞くリスニングで順番が合っている子が多かった。要因は、主語と主な動詞、キーワードとなる単語を聞き取っているからであると考えられる。このことから、生徒は、新しい表現や細かいところは聞き取れなくても、既習表現を注意深く聞くことで、大まかな流れを理解できていることが分かった。

② T or F や Q and A をオクリンクで送ることによる生徒の理解度の見える化



昨年まではプリントで行っていた「True or False」と「Q and A」を、今年度からミライシードのオクリンクで入力し、提出してもらうようにした。生徒は、入りに多少時間がかかったが、プリント学習の時とさほど変わりなく解いていた。教師側は、画面で生徒の進捗状況が分かるので、解くのが早い子、問題でつまずき時間がかかっている子、「Q and A」での答え方が分かっていない子などを把握し、支援や指導にいかすことができた。

③ リテリングによる表現の定着化

本文の内容を理解できたら、並び替えて使用したタブレット上のピクチャーカードを使ってペアで「リテリング」を行った。「リテリング」は読んで理解した話を自分の言葉で、他者

に説明する活動である。ペアの子に、本文の朝美になったつもりで、朝美の兄を紹介させた。理解した内容や覚えた表現を自分の言葉で説明することで、語彙や表現の定着、内容理解の促進、スピーキング力の向上に繋がったと思われる。また、3人称単数現在形のs(es)が抜けることもあったが、ペアで教え合いながら、そのミスに気付き、改善していく姿があった。

④ 書く活動によるさらなる表現の定着化

リテリングの後に書く活動を行った。話すことで、スピーキング力はついたが、書く活動を入れることで、さらに表現が定着した。書く段階でも、3人称単数のs(es)が抜けている子には、授業後にプリントを回収し、訂正を入れることで、気づかせることができた。また、話すときは流暢であっても、書く作業になると、手がとまってしまう子もいた。要因は綴りを覚えていないことによる不安からであった。「話す」だけで授業が終われば、達成感だけを感じて終わることができたかもしれないが、総合力をつけていくには、書く力も必要になってくる。分からない単語はひとまずローマ字やカタカナで書かせ、最後まで書き終えてから、綴りの分からない単語を調べるようにすると、間違いを気にすることなく、多くの分量を書くことができていた。

(3)主体的に表現を定着させる活動

- ① 英語の授業へ気持ちを切り替え、コミュニケーションし続ける Small Talk
- ② 主体的に話し、深める言語活動

① 英語の授業へ気持ちを切り替え、コミュニケーションし続ける Small Talk

英語の授業が始まる時、日本語から英語へ切り替えるのは、教師でも負荷がかかるものだから、英語の苦手な生徒はなおさらだろう。そんな気持ちや言語の切り替えに Small Talk は大いに役立った。ちょっとしたテーマで世間話をするように Small Talk をすることで、これから英語の授業が始まるのだという英語モードに切り替えていくことができた。

Small Talk で扱うテーマは、既習表現を使って話せそうなことや生徒の興味を引きそうな

こと、その時間の言語活動の内容に関連のあるものなどを扱った。

(実践例)

- ・ What sport do you like?
- ・ Which season do you like?
- ・ Which do you like, Takenokonosato or Kinokonoyama?

始めに、JET と ALT のモデルを見せたり、ALT のいないときは、JET と指名した生徒とのやり取りを見せたりして、対話活動が行いやすいようにした。

言語活動では、Check (確認)・Response (反応)・Question (質問) を大切にした。

【対話を続けるための基本的な表現の定着】

対話の開始	Hello./How are you? など
繰り返し (Check)	相手の話した内容の中心となる語や文を繰り返して確かめる。 相手: I went to Tokyo. 自分: Oh, Tokyo.
一言感想 (Response)	相手の話した内容に対して自分の感想を簡単に述べ、理解していることを伝える。 That's good. / That's nice. / Really? / Sounds good.
確かめ (Check)	相手の内容が聞き取れなかった場合に再度の発話を促す。 Pardon? / Once more, please.
さらに質問 (Question)	相手の話した内容について詳しく知るために、内容に関わる質問をする。 相手: I like fruits. 自分: What fruits do you like?
対話の終了	対話の終わりの挨拶 Thank you. Nice talking to you.

始めは一問一答で答えてしまう生徒も多かったが、時間を1分や1分半とくぎって話し続けた生徒を紹介し、認めていくことで、時間いっぱい話せる生徒が増えてきた。ペアでの活動の後には、言いたかったが何と言ってよいか分からなかった表現を尋ね、全体で確認した。その際、教師がすぐに言い方を教えるのではなく、生徒とのやり取りの中で、言い換えられる表現を模索し、生徒達自身で知らなかった単語を表現できるよう促した。例えば、「お風呂に入る」という表現が分からなかったときには、「wash my body」と言い換えたりした。ただ、まさにその表現を表す「take a bath」も知りたいと思

うその時に知ることが知識の定着に繋がると
思うので、教えるようにした。

② 主体的に話し、深める言語活動

「Unit3 Activities」では、主体的に話し、深める言語活動を行った。本単元では、放課後の校内を場面とし、部活について話したり、尋ねたりする。オーストラリア出身のメグが、シドニーにいる友達に日本の部活動について伝えるために、ビデオ撮影をしながらクラスメートに様々なことについて質問する場面が展開する。生徒が部活動をはじめ身近な話題でコミュニケーション活動することができる題材である。

【言語材料について】

言語材料は、what 以外の where、when、how many の疑問文、want to の文で、前単元に引き続き、基本的な疑問詞が含まれている。これらの疑問詞は日常生活で多用されるものなので、Small Talk で繰り返し指導することで定着させたい。

【言語活動について】

本時では、Small Talk で、疑問詞を用いてたずね合うことで疑問詞の用法を定着させた。展開の言語活動では、what の疑問文でたずねると同時に、want to ～ の表現を用いてALTの先生と一緒に食べたい給食を伝え合った。その会話が継続できるように、自分が Small Talk で会話した内容を対話活動で活用し、より豊かなコミュニケーションの実現に繋がった。

単元のゴールの、「いつ・どこなのかをたずねたり、数をたずねたりすることができる。」という力をつけるために、言語活動の中で where、when、how many などの疑問詞を多用するようにした。

本時のねらい (5/8)

「want to～」を用いて、ALTの先生と一緒に食べたい給食について話すことができる。

帯活動 Small Talk

本時の課題「ALTの先生と一緒に食べたい給食の献立を伝え合おう」に繋がる話題として、Small Talk では、「What food do you like?」について話した。

S1: What food do you like?

S2: I like *ramen*. How about you?

S1: I like curry and rice. Do you like it?

S2: Yes, I do. But I don't like *umeboshi*.
Do you like it?

S1: Yes, I do.

対話活動①

ALTの先生と一緒に食べたい給食の献立をペアで話した。

S1: What do you want to eat for school lunch? I want to eat curry and rice.
How about you?

S2: I want to eat *kaisendon*.

S1: I see. I want to eat salad.

S2: I want to have pudding and coke.

S1: Oh, cool!!

中間交流では生徒の良さをALTから全体に話したり、ALTの好みを知るために生徒からALTに「何が好きか」や「何を食べられるか」を質問したりした。人によって好みが変わったり、特に海外の方はベジタリアンの方もいたりするため、相手の状況に合わせた会話が必要だと生徒も気付くことができた。また、定着させたい表現である「want to～」をここで改めて黒板に提示した。

対話活動②

ALTからの返事をもとに改めてペアと対話をして、ALTと自分達が食べたい給食の献立について話した。この時、自分達が話している内容をタブレットで録音した。

S1: What do you want to eat for school lunch? I want to eat a hamburger.
How about you?

S2: I want to eat it, too. But Chelsea can't eat meat. How about tofu hamburger?

S1: Sounds good. Let's eat salad, too.

S2: I want to have pumpkin pudding and green juice.

S1: Oh, good!! That's so healthy!

2回目の対話活動では、相手の状況を考えながら、「ALTの先生はベジタリアンだからハンバーグを豆腐ハンバーグにしよう」などと、工夫しながらペアでメニューを考えることができていた。「want to～」の表現もさらに定着させることができた。

課題を「ALTの先生と一緒に食べたい給食の献立を伝えよう」とすることで、実現可能な身近な課題であり、「やってみたい」と生徒達が主体的に思えるものになった。

また、対話活動では、中間交流で、表現の良さや相手に合わせる必要性に気付かせることで、2回目の対話活動では、さらなる表現の定着と、独りよがりでない、互いに食べたいと思える給食を考えることができた。分からない単語は多少日本語が入っていたが、時間の限り、より満足のいくメニューについて話し続けることができたことは、コミュニケーションし続ける姿であり、学びを深める言語活動となったと考える。

次時では、録音した音声を聞きながら、意見を書いてまとめる活動を行った。話しているときには気付かない文法のミスに気付き、訂正しながら英文を書くことができた。文章として書き出すことで、より英語表現が定着すると同時に、自分の意見として、よりまとまりがあり、相手に分かりやすい英文を書くことができていた。

5 成果と課題

本研究の成果と課題について○は成果、△は課題と示す。

【帯活動でのICTの活用した単語学習】

- 単語学習やT or F、Q and Aをゲーム感覚で楽しんで解くことができていた。
- 英語を母語とする人がいなくても、「pages」を使って生徒が自分で発音チェックができることは、英語学習に有効であった。
- 教師が生徒の定着度を把握し、指導にいかすことができた。
- △「google form」や「Kahoot」に問題を作成することに時間がかかり、毎回問題を出すことが教師の負担になった。

【ICTを活用した読み取り活動】

- カラーの資料を利用することで臨場感が増し、生徒が主体的に学ぶことに役立った。
- 教師は生徒の進捗状況が人目で分かり、支援や指導にいかすことができた。
- △T or FやQ and Aなどの答えの入力作業に時間がかかる生徒が少数いた。
- △問題を解いた後、手持ち無沙汰になった生徒が、タブレットで他事をしてしまうことがあった。
- △タブレットで解いた問題は、復習しやすいよう

に、データを整理しておく必要がある。

【主体的に表現を定着させる活動】

- 実現可能な身近な課題を設定することにより、生徒が主体的に「やってみたい」と感じ、意欲的に活動することができた。
 - 2回の言語活動を取り入れることで、相手の状況に合わせた会話や既習表現を用いた会話に発展させることができた。
 - コミュニケーションし続けることで、生徒達自身で互いの表現から学び、良さを取り入れ、自分達で表現を広げたり深めたりしていくことができていた。
 - △ALTに直接、自分達の案を伝える活動も入れると、伝わる喜びをさらに実感させることができる。
- 上記の課題点を踏まえ、今後、さらに改善していくことが大切である。

6 終わりに

今回の実践において、ICTは有効に活用できるところは活用していくとよいが、必要以上に活用すると、デメリットも出てくるように感じた。活用の仕方によって、授業をゲーム感覚に楽しんだり、臨場感を出すことができたり、生徒の理解度を把握することができたりしたので、今後も必要に応じて活用していきたいと思う。

また、言語活動では、「できた」、「分かった」と感じられるところを教師が予想し、仕組んでいくことで、生徒はどんどん主体的にコミュニケーションをし続けることができ、こちらから教えなくても、自分達で互いに良さを取り入れ合い、学びを深めていくことができるのだと実感した。生徒の力を生かすも殺すも、教師次第なのだ。今後も、主体的な生徒を育てるために、教師である私自身が学び続けていくことを大切にしたい。

<参考文献>

- ・文部科学省 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説
- ・文部科学省 小学校外国語研修ガイドブック